

〈研究ノート〉

高校留学生在が社会とつながる 日本語授業の実践報告

—— 新聞への投書が生み出したものと教師の役割 ——

志賀村 佐 保・澤 邊 裕 子

1. はじめに

本稿では、2021年度に行った高校留学生を対象とした「社会とつながる日本語授業」について報告する。高校留学生に関する実践研究は、「年少者（児童生徒）に対する日本語教育」と「留学生に対する日本語教育」の2つのカテゴリーにまたがるものとなる。2019年に文化庁文化審議会国語分科会が示した「留学生に対する日本語教師に求められる資質・能力【初任】」および「児童生徒等に対する日本語教師【初任】に求められる資質・能力」においては、それぞれ必要とされる技能について「社会とつながる力を育てる技能」が挙げられている。「留学生に対する日本語教師に求められる資質・能力【初任】」におけるそれは、「教室内外の関係者と学習者をつなぎ、学習者の社会参加を促進するための教室活動をデザインすることができる」、また「児童生徒等に対する日本語教師【初任】に求められる資質・能力」におけるそれは、「児童生徒等を取り巻く社会の中に、自身の役割を位置づけ、指導・支援の内容を決定し、実施することができる」と「学校や地域、家庭などでの児童生徒等の活動や、将来を想定した指導を行うことができる」の2つが具体的な技能として挙げられている。このように「日本語学習者が社会とつながる」ための力を育てることは、日本語教師に求められる技能として重要なものと位置づけられている。近年、日本語教育に多大な影響を与えている欧州評議会のCEFRにおいても、言語学習者は「社会で行動する者 (social agents)」という視点で捉えられている。そこには、初級学習者だから社会につながることができない、という考え方はなく、学習者がもっている言語知識や経験を生かして、社会活動を行うことができる存在だという捉え方が示されている。そして、授業も「社会で行動する者 (social agents)」が参加する社会活動の一つであり、学習者と教師がともに協力し合ってい

る場だと考えられている（奥村・櫻井・鈴木 2016：40）。筆者らもこの考え方に共感し、高校留學生に対する日本語授業の場を、「社会で行動する者（social agents）」が参加する社会活動と位置づけた。本稿で報告する授業は、高校留學生が持つ日本社会への問題意識を出発点とし、高校留學生の社会参加を促し、教師とともに協力し合うとともに、留學生が持つ個別の将来の目標に寄り添い、サポートすることを目的として行われたものである。本稿では高校留學生の成果物と個人インタビューの分析をもとに、この実践が生み出したものについて明らかにし、高校の日本語教育現場において教師に求められる役割について述べていきたい。まず、澤邊が高校留學生に対する現状と先行研究についてまとめ、本実践のオリジナリティについて述べる。次に、志賀村が授業の実践内容について述べ、高校留學生へのインタビューから本実践が生み出したものについて考察する。最後に、日本語教師に求められる役割について本実践を踏まえて2人の筆者が検討し、論じていきたい。

2. 高校留學生に対する日本語教育

文部科学省による「平成29年度高等学校等における国際交流等の状況について」によると、高等学校等における外国人留學生（3ヶ月以上）の受け入れは、前回調査より474人増加の2,621人と報告されている¹。この数は、「留学」の在留資格を持つ日本への留学者数（全体）から考えれば非常に小さな割合である。このような背景もあり、高校留學生を対象とした日本語教育に関する先行研究は多くないが、正規の長期留學生に関する研究として近年発表されたものに、寺田（2011）、齋藤（2018）、猪又（2021）などがある。

寺田（2011）は高校留學生に対する日本語教育の問題と課題を作文指導の観点から述べたもので、日本語授業の計画を作るにあたっては、留學生の卒業後の進路が大きな影響を及ぼすとしている。齋藤（2018）は日本語学習支援の立ち上げから2年間の実践経過を踏まえて高校留學生の学びの捉え方について考察し、学校における日本語教師の役割について論じたものである。留學生の学びを「移動経験をめぐる学び」「高校生としての学び」「ことばの学び」という3つの学びで捉えることができるとし、高校留學生を指導する日本語教師の役割は日本語を教えることだけでなく、これら3つの学びの観

¹ 出身国は多い順に中国、タイ、アメリカ、韓国、ドイツとなっている。

点から、それらを支援することが日本語教師の役割ではないかと述べている。猪又（2021）もまた、高校留学生に対する日本語教育の目的がしばしば「日本語での教科学習に『参加』できるようになること」と表現されてきたことを批判し、高校留学生が個々に持つ経験やモチベーション、言語習得の力をもとに、自分に合う方法で学び、自分に必要なことを理解し、さまざまな問題を解決できる自律的な学習者を育てる方法として「アクティブ・ラーニング」を取り上げ、その実践例を報告している。齋藤（2018）や猪又（2021）が述べるように、筆者らも高校留学生に対する日本語教育の場を「教科学習にスムーズに移行できる日本語の力を獲得する場」として在席学級の授業についていくための予備教育的な場に狭めるのではなく、高校留学生を「社会で行動する者（social agents）」の一人として社会参加を促進する足場かけの場として位置づけたいと考えている。これまでの高校留学生に対する日本語教育の研究では、留学生は同時に「高校生」であるという発達段階に注目し、日本語教師の役割をその段階の学びについて支援する者として位置づける提案とその実践報告がなされてきた。しかしながら、その中に「高校留学生が社会とつながる力を育てる」という視点は十分にあったとは言えない。本稿で報告する実践のオリジナリティはその点にあり、本報告は高校留学生に対する日本語教育を考えるうえで一つの参考になるものとする。

3. 実践の内容

3.1. 学習者の概要

本授業における日本語学習者はA高校に通う香港出身の高校留学生、劉さん（仮名）である。劉さんは、2020年10月にA高校の留学生として来日した。当初、4月に来日予定であったが、コロナの影響を受け、入国が半年ほど遅れ、それまで日本と香港をオンラインでつなぎ授業を受けていた。劉さんは2020年に留学する前にも、旅行や、短期留学で何度か日本を訪れている。日本に留学しようと思った理由について、「ニュースを見て社会系、政治系とかもいろんなことを調べるのが好き。いろんなことに興味があって、グローバル的な考えがあって、世界を見てみようと思ってサマーコースに参加した。」「2019年の4月か3月に気持ちが変わった。香港の高校のコースとか大学が難しすぎていやになって、自分が興味ある日本かオーストラリアに行こうかと思った。日本に来たいと思って、自分で探して、この学校（A高

校)の先生に日本語で問い合わせた。」(2021.7月インタビュー)と語っている。なお、劉さんは2021年7月に日本語能力試験を受験しN1に合格している。

3.2. 実践内容

筆者の一人である志賀村は2021年5月より5名の高校留学生の日本語の授業を二人の日本語教師で分担して担当していた。1コマ45分の授業で、文法を週1コマと、小論文2コマを担当していた。後期は受験に向けて必要な小論文や、読解問題など、各自の課題に取り組み、個別に指導していた。受験する大学の入試の時期も各自異なることから、進学先が決まる時期も異なっていた。そこで、進学先が決まった留学生には、受験後に行う日本語授業の内容について希望を聞き、自由な課題を課す個別指導をすることにしていた。その中で筆者(志賀村)は、高校生が社会とつながる一つ的手段としてK新聞社への投書を提案した。K新聞社の投書欄は400字～500字程度の文字数であり、文字数的にも負担が少なく、また、テーマも自由に設定できる。これまでの日本語教育の中で行われてきたように与えられたテーマで作文をするのではなく、自分が本当に言いたいことを、自由に意見し、また公の場で発表するという責任や緊張感も経験することができると考えた。留学生全員に呼びかけた結果、クラスで一番早く進学先(メディア関係)が決まった劉さんが投書に挑戦したいと手を挙げた。

以下に、2021年9月から12月にかけて行った劉さんに対する個別指導の内容を示す(表1)。

表1 個別指導の内容

年月	活動と新聞掲載の流れ
2021年 9月	新聞の読者投書記事を読んでみる
2021年10月	投書記事を書いてみる(作文第1回目)
	第1回目の作文のフィードバックをうける(作文第2回目)
	投書する記事を書くためにテーマを考える
	投書するテーマを選ぶ
	パラグラフライティングで作文を書く(作文第3回目)
2021年11月	記事をK新聞社に投稿する
	K新聞社に掲載される

2021年12月	K新聞社記者より取材依頼が入る
	取材日程調整、校長先生に許可を取る
	想定質問を考える（質疑応答練習第1回目）
	想定質問を考える（質疑応答練習第2回目）
	K新聞社を訪問する
	R新聞社の記者とオンライン対談をする
	K新聞社のカメラマンと写真撮影をする
2022年 1月	インタビュー記事が掲載される

(1) 新聞の読者投書記事を読む

2021年9月、小論文の授業内でクラス全員に、参考資料として大学留学生による投書記事のコピーを配布した。投稿記事の構成（問題提起、意見など）について解説し、別のテーマで意見文を書く授業を行った。この日、クラスに大学受験に区切りが付いたら投書欄に投稿してみることを提案してみたところ、劉さんが投稿を希望したため、受験が一段落した後に投書を試みることとなった。

(2) 新聞に投書する準備

新聞に投書する準備として、大学留学生の投書をもう一度読み、それを参考に意見文を書いた。大学留学生が投稿した内容は松島の観光地に外国語のパンフレットを増やしてほしいというものであった。劉さんはそれをモデルにしながら、日本で生活している外国人が情報を得やすいように、公共施設に外国語の張り紙やパンフレットが必要であるという内容の作文を400字程度書いた。

次の授業において前回書いた文章の文法的なエラーや構成についてフィードバックした。また、内容は大学留学生の主張に影響を受けすぎていたため、劉さんのオリジナリティが出るように、どんなテーマで投稿するかを考える時間とした。テーマを考える際、進路が決まり授業に参加していた他の留学生1人も加わり、劉さんと他の留学生の3人で意見を出し合った。「外国人留学生という視点から見た日本」というテーマには全員の留学生が興味をもっており、出てきた案には教育問題、資源問題、若者の政治参加、技能実習生に関わる問題などさまざまなものがあった。この中から、自分が最も書きた

いテーマを考えてくることを宿題とした。

その後の授業で劉さんから「日本のマナーを日本に来る外国人に知らせるべきである」というテーマで書くことにしたと報告があった。それを踏まえて、そう思ったきっかけや、具体的な経験を再度話しながら、ブレインストーミングを行った。具体的なエピソードが出始めたところで、パラグラフライティングで、「自己紹介」「具体的な経験」「自分の主張」の順で書くように指導した。

(3) 新聞に投稿する

2021年11月、助詞や使役形のエラーなど文法的な部分を訂正した文章を確認し、教室で一緒にネットを介してK新聞社の投書欄に投稿した。その日の夕方、K新聞社から投稿の確認と採用される旨の連絡があった。

(4) K新聞社からの取材依頼を受け、インタビューに答える練習をする

2021年12月、劉さんが投書した記事を読んだK新聞社報道部の記者より追加取材依頼のメールが来た。2022年4月に民法改正により成年年齢が20歳から18歳に引き下げられることになるが、これに関して、東北各地に住む様々な立場の18歳から話を聞き、特集記事を組んで、各自が考える日本の将来像や、その心象風景について紹介したいとのことで、留学生である劉さんから見た、日本社会の現状に関する率直な意見を聞きたいという内容であった。依頼を受ける形で、その後の2回の授業において想定される質問を考え、それに対する答えを準備した。

(5) K新聞社の取材を受ける

その後、K新聞社へ劉さんと筆者（志賀村）が訪問し、2時間半ほど取材を受けた。取材の主な内容は、日本に留学した経緯、選挙の時の高校生の政治参加や雨傘運動²についてであった。2022年1月に劉さんを取材した内容の特集記事がK新聞の一面に掲載された。

² 香港で2014年9月28日から79日間続いた民主化要求デモのこと。デモ参加者が雨傘をさして催涙弾や催涙スプレーで排除しようとする警察に抵抗したことから雨傘革命、雨傘運動と呼ばれる。

(6) R新聞社の外国人記者とオンライン対談をする

2021年12月後半の授業では、R新聞社の記者とオンラインで対談を行った。劉さんはK新聞社を訪問した際、新聞社内を見学させてもらい、「記者になりたい」と発言していた。そこで筆者（志賀村）の個人的なネットワークを活用し、R新聞社にオンライン対談の依頼をした。R新聞社は台湾人記者の王さん（仮名）を紹介してくれ、オンライン対談が実現することとなった。王さんはR新聞社初で、唯一の外国人記者である。対談の時間は45分で事前にもらった王さんが書いた新聞記事を基に、新聞記者になった経緯、これまで努力してきたこと、これまで取材してきたこと、高校生の今やっておくべきことなどを聞いた。また、紙の新聞を購読し、劉さんが投稿した記事をスクラップして残しておくこと、コミュニティは大事なので人脈を広げること、自分が興味関心のあるキーワードを考えることなどの具体的なアドバイスをもらった。



写真 オンライン対談の様子

4. 劉さんへのインタビュー

本章では劉さんが本授業について、どのような気持ちで臨んでいたのかについてインタビューでの語りをもとに明らかにしていく。

4.1. インタビューの概要

インタビューは2022年1月に、大学の研究室で筆者2人と劉さんの3人で行った。インタビューは以下の質問リストを中心に、追加で質問を加えるなど半構造化インタビューの方法で約1時間行った。

- ①新聞投稿について、どのような気持ちで臨んだか。
- ②掲載された時、どのような気持ちだったか。

- ③インタビューされた内容についてどう思ったか。
 - ④目標とする職業の人（R新聞社の記者）との対談にどのような感想を持ったか。
 - ⑤将来の目標を達成するために今、すべきことが具体化されたか。
 - ⑥今後、社会との関わりをどのようにしていきたいと考えているか。
- インタビューは同意のもとICレコーダーに録音し、その後文字起こしをして分析の資料とした。

4.2. インタビュー結果

①新聞投稿に臨んだときの気持ち

劉さんはこれまで新聞に投稿した経験はなく、授業で初めて経験した。新聞への投稿については「そもそも、意見を伝えるって、昔は面倒くさいと思ってた。」という。しかし、劉さんはクラスの留学生の中で唯一、投書に前向きであった。その理由について劉さんは、「みんなめんどくさいっていったけど、私は学校が決まるのが早かったから。だからやろうかなって。」と語っている。受験の時期が早く、進学先が決まった後であったため、心に余裕が生まれた時期であったことが、気持ちを前向きにさせた大きな要因であったことがうかがえる。投書するテーマの選択に関しては教師とともにブレインストーミングを行ったことで、具体的に絞られていったと振り返っている。

②掲載されたときの気持ち

2021年11月に劉さんの投書が掲載された。劉さんは「まあ、(反響は)結構大きくて。」と述べるように掲載されたときの周囲の反響が大きかったと感じている。翌週学校に登校したときに、担任の先生や校長先生などに、記事を見たと声を掛けられたという。また、2022年1月に特集記事として劉さんの取材記事が掲載されたことも大きな反響をよんだ。しかし若者の政治参加という本人の政治の意識を扱った内容であったこともあり、周囲がどのように思うかなどを考え、反響の大きさには若干不安も覚えたようである。

③インタビューされた内容について

先述したように2021年12月に劉さんはK新聞社を訪問し、日本に留学した

経緯や、選挙の時の高校生の政治参加についてどんな印象だったか、香港の雨傘運動を見たことがあるか、またその印象についてどう思ったかなどについて取材を受けた。劉さんは雨傘運動については父親の勧めで幼少期に見学に行っただけであったが、このような話を聞いてくれたり、自国の政治に興味を持ってくれる外国人がいたりすることについて肯定的に捉えていると語った(語り1)。取材されたときの質問は想定していた質問とは違う内容が多かったが、記者の質問の内容を嬉しく感じ、自分の考えを率直に述べることができたと考えていた。

(語り1)「政治の話はいいことなんです。香港以外の方が香港で起こっているこういうことについて考えてるって、すごく嬉しかった。そもそも海外の政治って話したくないっていうイメージもあるかもしれないから、話を聞いてくれて、話してくださいって言われたら、ありがとうございますって、ちょっと嬉しい気持ち。」

劉さんは新聞社本社への訪問や記者とのインタビューを受けるという体験を通して、メディア関係の道に進むモチベーションが上がったように見えた。それは、インタビューが終わったころ、記者に対し「記者になるために今しておくことは何ですか。」という趣旨の質問をしていたことからもうかがえた。

④目標とする職業の人(新聞記者)とのオンライン対談について

R新聞社の記者が唯一の外国人記者である台湾人だったため、日本で活躍する外国人という部分が印象的だったようである。劉さんは、日本が技能実習生などの外国人労働者を受け入れる反面、治安の悪化などの悪影響を外国人のせいにするくらいがあるのではないかと感じていた。そのような排他的な側面を持つ日本社会という環境の中で、それを乗り越え、記者になった外国人ということが印象的だったようである(語り2)。

(語り2)「印象的だったことは、国籍関係なく、できるのはすごいなって。まあ、今でも外国人がそういう駄目とか、そういう考えを持ってる日本人はまだまだいる。日本だと単一民族で、アメリカとかカナダとかだと多くの民

族が存在して共存している感じだけど、日本だと（民族が）一つしかないから、あまり移民文化受け入れてないし。外国人は労働力として欲しいけど、もし外国人が自分の職場で働いたら悪い影響あるんじゃないとか、そういうイメージがあるけど、それがなくて記者になれたのはすごい。やっぱり、今でも日本人が外国人に対して、まあ、一部、全員じゃなくて一部の人でもなんか、外国人はよくないとか。自分の風習とは違う人は入れませんか、そういうイメージもってるから、それを乗り越えた外国人はすごいなって。」

⑤ 将来の目標を達成するために、今すべきことが具体化されたか

劉さんはK新聞社を訪問した際、記者に「記者になるために今しておくことは何ですか」という趣旨の質問をしていた。この時、その記者からは、様々なジャンルの本をたくさん読むことをアドバイスされていた。その後、授業の時に、進学先の学校からの課題図書の中に、自分が最近読んで卒論のテーマにしていた本があったこと、自分が問題意識がある本を今は読んでいるという趣旨の発言を繰り返していた。また、R新聞社の記者からのアドバイスで、自分が投稿した記事をスクラップしておくように言われたのだが、劉さんはアドバイスを即、実行していた。これからは、日本にいる香港人のYouTuberの取材をしたいと語る。その理由は、劉さんは将来、若者の政治参加や、自国のこと、自国と日本との関係について発信していきたいからである(語り3)。

(語り3)「やっぱり、政治参加。あとは、香港のこと。多くの人に。もっといろんな人のために。日本でも香港のことについて、発信しているものもあるけど、わかりにくいし、日本の市場は何を求めているのか。香港のことばっかりじゃなくて、日本とはどんな関係あるのかを発信したい。」

その目標を達成するために、今、日本にいる香港出身のYouTuberと連絡を取り、話を聞いてみたいと考えている(語り4)。

(語り4)「日本にいる香港の方、取材しようかなあと思って、最近、香港のYouTuberで日本に移住した人がいる。A県に住んでるの。A県のB市。」

この発言は、R新聞社の記者に人脈を大事にすることをアドバイスされたのだが、それを意識しているのではないかと考える。

また、R新聞社の記者には興味関心があるキーワードを3つ考えるように言われていた。将来メディアを通じて発信したいことは何かという問いに対して、R新聞社の記者が3つのキーワードを言っていたが、劉さんは今4つキーワードがあると語っている(語り5)。

(語り5)「台湾人の記者さんと話したときに、台湾人の記者さんが自分のキーワードを三つ言った。わたしは、香港、若者、留学生、外国人が、キーワード。」

K新聞社、R新聞社の記者の話聞いて、スクラップする、情報を発信している人に連絡しようとする、興味があることを取材に行こうと考える、キーワードを考える、など、具体的な行動をしようとする姿勢がうかがえることから、将来のために、今しておくべきことが何なのかが見えてきたのではないかと考える。

⑥今後、社会との関わりをどのようにしていきたいと考えているか

劉さんは、将来、日本にいる外国人のサポートをしたいと語っている(語り6)。

(語り6)「将来は、日本にいる外国人のサポートとかをしたい。記者としていろいろな人の考え方を聞いて、その後、多くの留学生とか外国人が暮らしやすい環境を作りたい。そのためには、日本にいる人の考えを直さなければいけない。そこで、わたしができることは情報発信だなあって思う。一部の日本人は結構古い考え方の人がいて、外国人は良くないとか。まだそういう考えを持つてる人がいるから。(中略) 伝統も必要だと思うけど、政治の考え方も変わらなきゃいけないだよ。若者とかにもそれを理解してもらわないといけないし。情報がないとやっぱり何がいいか自分で選べないから、新聞とかテレビとかねメディアって大事。私なら、若者を対象とした情報発信できるかなって思ってる。若者にあった情報発信の方法があると思う。」

劉さんはそのための足がかりとして、記者になり、いろいろな人の考え方を取材したうえで、日本で、外国人が暮らしやすい環境を整えたいという。外国人が日本で住みやすくなるために必要なのは日本人の意識改革であり、そのために日本人に対して情報発信をしていきたいと考えている（語り6、7）。

（語り7）「私はジャーナリストとしていろんな意見を聞いて発信してもっと多くの人が政治とか社会に対し関心を持てるならいいかなって思ってます。」

劉さんが情報発信をする対象は日本人であり（語り8）、日本人に対して、若者の政治参加や自国のこと、自国と日本との関係などを発信していきたいのだという。

（語り8）「今私の対象は、日本人なんです。香港の方じゃなくて、日本で日本の高校で香港のことを教えるけど複雑すぎて日本人は分からないですよ。日本人は自分と関係あるのかと思いがちだから、逆にもっと簡単に、香港のことを、日本人に対して日本の何に影響するのかについて話したら、自分のことと関係があるのかってわかるはず。そして、自分も興味関心が出たら、もっと深く知りたくなるはず。」

劉さんはTwitterやInstagramを通じて情報発信するのが若者に対しては効果的であると考えている（語り9）。ポスターのように目に留まりやすく、わかりやすく、写真があり、文字数も少ない媒体が適していると考え、このような若者の心がつかめるツールを使って情報を発信していきたいと語った。

（語り9）「自分で情報発信したいツールはTwitterかなあ。Twitterで、何か写真、イラストとか使ったら、わかりやすくて、使いやすい。Twitterとかインスタ、インスタのストーリーとか。文字制限ないけど、結構多い文字より、短くてわかりやすい方がいい。写真は絶対ないと、目に留まらない。ポスターみたいな感じ。ストーリーとかは、ポスターみたいな感じでぱっとみて、気になって下にスクロールしたら、詳細ページを見る。わかりやすいほ

うがいい。文字だらけの、論文みたいな感じの記事は読むのやめとこうってなる。だから簡単に。わかりやすく。」

4.3. 本実践が生み出したもの

インタビューの語りで劉さんが述べているように、劉さんは出身地においても新聞に投書した経験はなく、授業の中で初めて経験したことであった。「意見を伝えるって、昔は面倒くさいと思ってた。」と語る劉さんが投書に前向きに臨めたのは、受験が終わる時期であったという时期的なものも大きかった。しかし、その行動が投書文の掲載、インタビュー取材などの活動に発展していった。新聞に記事が掲載された影響は大きく、劉さんは周囲からの反響に驚きつつ、今、何をすべきで、これから何をしていきたいかについて、より具体的に考え、述べることができるようになった。それは、より社会のことを学び、多くの人々の考えを聞き、社会に対してその声を届け、日本社会にいる外国人のサポートをしていきたいという目標と強く結びついていった。劉さん自身が自らを「社会で行動する者」として自覚し、自らが社会を変える一人として活躍できる可能性を認識したとも言えるだろう。このことから、本実践が生み出したものは、劉さんの「社会で行動する者として、これからも社会に積極的にかかわり続ける姿勢」ではないかと考える。

5. 本実践から考える教師の役割

以上、本稿では高校留学生、劉さんに対する社会とつながる日本語教育の実践について報告してきた。自分が日本で生活するうえで感じた問題意識を新聞に投稿するという一つの教室活動から、新聞社の取材を受けることとなり、そのインタビュー記事が新聞に掲載されるという一連の経験が将来の夢へと具体的につながっていった過程を述べた。この一連の過程を図に表すと、以下の図1ようになる。

図中の(1)～(6)は3.2実施内容で述べた活動を示している。

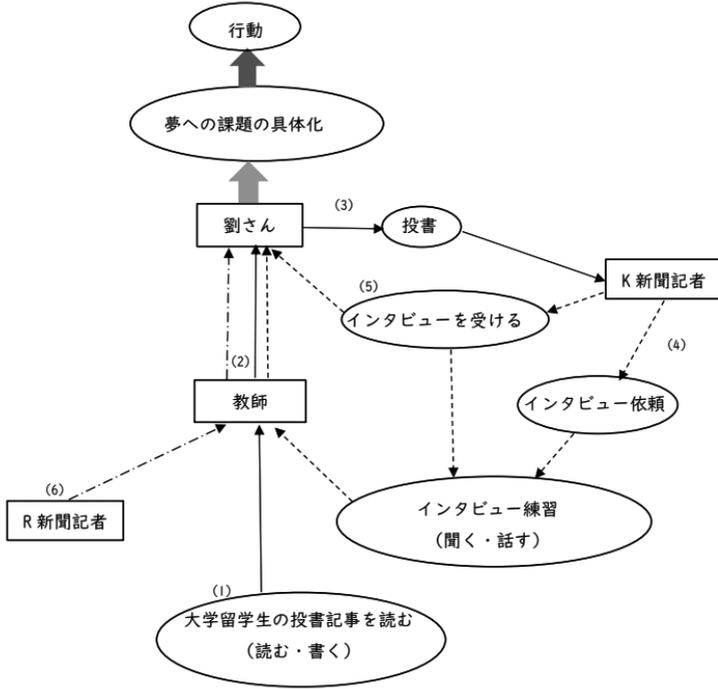


図1 実践の過程

これらを踏まえ、ここでは、本実践を行ううえで教師に必要とされた役割として、「社会において、目的や場面にあわせた適切な日本語を使う場を作ること」、「生徒のキャリア発達の足場かけを行うこと」、「偶発的な出来事に柔軟に対応し、学びにつながるネットワークの結び目を増やしていくこと」の三点を挙げたい。

まず、役割の一点目として「社会において、目的や場面にあわせた適切な日本語を使う場を作ること」を挙げたい。社会に向けて意見を発信する日本語授業においては、使用するメディアに合わせた、適切な日本語を使う実践を行うことができる。今回の実践では、社会に向けて意見を発信するツールとして新聞というすでに確立されたメディアを使ったことにより、自分が書いた意見が不特定多数の多くの人の目に触れるという体験をした。現在TwitterやInstagramなどのSNSが若者には主流のメディアとなっている。

しかし、新聞というすでに確立されたメディアにおいては、様々な層の読者がいるという特性を活かしたことにより、日常的に劉さんが触れているTwitterやInstagram上の表現とは異なる日本語表現に触れることになった。TwitterやInstagramなどでは、若者言葉や口語、またネット特有のネット用語などが用いられているが、新聞に投稿する際には口語ではなく、新聞に投書する際の特有の日本語表現、文章の構成、意見の効果的な訴え方などを指導することになった。さらに不特定多数の人の目に触れ、記録に残るということを伝えたくて、投書する内容も改めて考えなおし、慎重に吟味するという指導も必要になった。

日本語の授業では、「何のためにその日本語表現を使うのか」という目的や場面を意識させることが必要である。高校生を対象とした日本語教育では、通常学級に入り、教科学習についていくための基礎的な日本語の文法や語彙の教育や試験対策が重視され、高校生が社会で実際に使用する場面と言語の学びが乖離してしまうことがある。社会経験が少ない中、どこで用いる表現なのか、どんな印象を受けたり与えたりする表現なのか、実践的な表現を教える授業内容なのにもかかわらず、学習者が実際に経験していないために、その表現を知っていても適切に使用することができないこともある。今回の実践では、はじめに計画していなかった「記者からのインタビューに答える」という活動も劉さんの投書がきっかけとなって生まれた。インタビューの受け答えのためには、想定質問を考え、内容もさることながら、初めて会った目上の社会人に対する言葉遣い、表現もあわせて授業で扱うこととなり、授業内容は拡大、発展していった。投書文を読み、自分自身の意見を書くという、「読む」「書く」だけでなく、インタビュー活動も加わることによって「聞く」「話す」活動もより充実することになった。計画的であったとはいえないが、状況にあわせてシラバスを柔軟に変えて、対応した結果である。重要なことは、ロールプレイでも教室内で完結する発表でもなく、現実社会の人々となつがる経験の中で「読む」「書く」「聞く」「話す」という四技能の伸長を促すことができたということであろう。

二点目の教師の役割として、「生徒のキャリア発達の足場かけを行うこと」を挙げたい。劉さんへのインタビューからはこれまで行ったことのなかった「新聞への投書」という行動がきっかけとなり、実際に自分が目標とする職業の人や社会と接することで、将来に向けて今、すべきことや課題がより

具体化され、また、具体化されたことにより、モチベーションが上がり、受けたアドバイスを実行する姿がうかがえた。高校生のような若い世代は様々な物事に興味が出る一方で、漠然とした将来や、進路について具体的に今何をしたらよいかかわからず、ただ時間だけが過ぎていくことに焦りや不安を覚えることもあるだろう。劉さんの事例はまず社会とつながる経験をもち、具体的な社会の人と対話することによって、今の社会の問題は何なのか、自分にできることは何か、自分ならどうするかなど、進路についてより深く考え、取り組んでいける足がかりが得られることを示唆している。つまり、高校生に対する、社会につながる日本語教育の実践は、キャリア教育としての側面も大きいと言える。

三つ目として「偶発的な出来事に柔軟に対応し、学びにつながるネットワークの結び目を増やしていくこと」も本実践における教師の役割として挙げられる。もともと、本実践は新聞への投書がゴールであったが、その投書が新聞社からの取材につながるという、当初は全く誰も想定していなかった奇跡的な出来事に発展した。その偶発的とも言える出来事に対し、授業では必要な練習を加えたり個人的なネットワークを駆使したりして、柔軟にシラバスを考え、生徒にとってより発展的な学びができるように工夫した。このように、生徒一人ひとりの未来につながるネットワークの結び目を増やしていくことは、日本語授業の担当教師にも十分可能なことなのではないかと考える。

最後に本実践の意義と課題を述べたい。劉さんが今回、新聞社への訪問や記者との対談をきっかけに、自らの力で日本在住の香港出身者に取材を試みようと考えていることから、日本語クラスにおける一つの教室活動が生徒に与える影響の大きさがうかがえる。本稿で報告した事例は、高校留学生一人という極めて限られた対象の事例であるが、高校生が社会とつながる日本語教育実践の一つのケースを示したという点で意味があったのではないかと考える。

しかし、今回の劉さんのように将来なりたい職業が明確な高校留学生は多くないかもしれない。社会経験も乏しく、世の中にどんな職業があるのかもまだわからない中、将来なりたい職業、将来の目標がまだはっきりしていない高校生に対して、「社会で行動する者」として自覚させ社会とつなげる足場かけのサポートをどのようにしていけるのか、高校生と社会をつなげる

ためにどのような日本語使用場面を提示できるのか検討することは今後の課題である。特定の職業に限らず、高校留学生と社会をつなげる試み、キャリア支援につながる日本語教育実践を今後も考え続けていきたい。

参考文献

- 猪又由華里（2021）「高校留学生のためのカリキュラムデザイン—アクティブ・ラーニングを意識した授業実践から—」『宮城学院女子大学大学院人文学会誌』22号、pp.47-67
- 奥村三菜子・櫻井直子・鈴木裕子（編著）（2016）『日本語教師のためのCEFR』くろしお出版
- 齋藤恵（2018）「学校における日本語教師の役割とは何か—高校における留学生支援を通じて」『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する』9、pp.19-27
- 寺田智美（2011）「高校留学生に対する日本語教育の問題と課題—作文指導からみえてきたこと」『金沢学院大学紀要 文学・美術・社会学編』9号、pp.137-156
- 文化庁文化審議会国語分科会（2019）「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版」
- 文部科学省（2019）「平成 29 年度 高等学校等における国際交流等の状況について」https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/08/_icsFiles/afiel_dfile/2019/09/19/1420498_001_1.pdf（2022年4月28日閲覧）
- 村野良子（2001）『高校留学生に対する日本語教育の方法—言語学習と文化学習の統合と学習支援システムの構築にむけて—』東京堂出版